

鼓腹撃壤(こふくげきじょう)

*安田佳哉



1. 「幸福度指標」

昨年12月に内閣府はGDPなどの経済指標だけでは測れない国民の幸福度を示す指標の試案を発表した。試案では主観的幸福感を中心に①経済社会状況、②心身の健康、③地域や家族等との関係性を3つの柱とし、130余りの指標について体系化が図られている。ただし、単一の統合指標は策定しないとしており、国民の価値観が多様化している中、幸福度を測ることの難しさが感じ取れる。

2. 鼓腹撃壤

国民が太平の世を享受し幸福に暮らしているさまを表す「鼓腹撃壤」という言葉がある。この言葉には次のような故事がある。

古代中国の伝説的な君主である堯(ぎょう)は、徳により天下を治めた為政者として儒教においては理想的な天子とされる。

さて、そのような堯も治世が50年を過ぎると天下が本当にうまく治まっているのか不安を感じるようになった。そこで町中に忍び出て自らの耳目で確かめようとした。子供たちが「私たちが楽しく暮らせるのも全て天子様のお陰です」と歌うのを聴いたが堯は満足できなかった。

更に歩を進めて町はずれまで来ると老百姓が腹を鼓のように叩き(鼓腹)足で地面を踏み鳴らし(撃壤)ながら、楽しげに「日が出たら働き日が暮れたら休む。井戸を掘って水を飲み田畑を耕した実りで腹を満たす。帝のお陰などはなんら受けていない」と歌っていた。

この老百姓の歌を聴き、天下が自分の理想通りに治まっていることを知って、堯は大変満足した。

即ち、誰がどのようにして行政サービスを提供してくれているかを国民が意識しているようでは幸福な社会とは言えない。行政の存在をなんら意識することなく安全、安心で豊かに暮らせるのが真に幸福な社会であるという考えである。

3. 社会資本整備と鼓腹撃壤

河川、道路、下水道、公園、港湾・空港等、国土交通省がその多くを担う社会資本も、国民の幸福度を高めるためのものであることに疑いの余地は無いであろう。これらの社会資本の整備と管理に携わる者は過去、この「鼓腹撃壤」を理想としてきた感がある。例えば、水道の蛇口を捻れば水がふんだんに使え、使った水は排水口へと消えていく。大雨が降っても町が水浸しになることもない。国民がダムや堤防、下水道のことを意識せずとも湧水や洪水、汚水処理の心配をすることなく暮らせる社会。そのような社会を目指して。

しかし時代は変わり、人口減少と少子高齢化の進展、更には財政状況のひっ迫によって、社会資本の整備と管理にも選択と集中を迫られる中、「鼓腹撃壤」では立ちいかななくなっている。社会資本が経済・社会・文化活動に果たしている役割・効用を国民に適確に伝え、国民による適切な判断の下にその整備と管理を進めていくことが不可欠となっているのである。

一方で、社会資本が大規模かつ高度なものとなり経済・社会・文化活動も複雑化する中、社会資本の役割・効用を適確に把握することが難しくなっているという現実がある。その一例として、私が経験した東京に大雪が降ると秋田の野菜価格が上昇するという現象について紹介したい。

4. 東京の積雪と秋田の野菜価格の上昇

秋田県にある建設省湯沢工事事務所(現、国土交通省湯沢河川国道事務所)に私が勤務していた平成10年1月に、東京を始め首都圏にかなりの積雪があった。秋田県湯沢市付近は県内でも雪の多い所で、地域の首長さん方からは「都会の者も雪国の苦労を少し経験してもらおう良い機会だ」などという発言が聞かれた。ところが見る見る野菜の価格が上がり始めすぐに2倍になってしまった。

当時、このことに興味を抱いて冬期に秋田県で売られている野菜類を調べてみたところ愛知県産が多いことが分かった。しかし、ここで疑問を感

じる。雪が降ったのは首都圏であり、その影響が愛知県での野菜生産に及ぶことは有り得ない。ではなぜ野菜の価格が急騰したのか。原因は流通システムの機能不全であった。

野菜はその多くが生産者から卸売市場を経て小売店へ運ばれ消費者の手元に届く。愛知県産の野菜が秋田県に来る際に東京の卸売市場を経由することが多いことから、積雪による市場の混乱で秋田県内での野菜価格が急騰したという訳である。

分かっただけならば簡単なことだが、私たちの暮らしが全国にまたがるような大規模なシステムによって支えられていることを改めて実感した。

5. 野菜の生産地・消費地と流通

良く考えてみると、昔の秋田県では冬期に野菜が店頭で豊富に並べられているようなことは無かったはずである。秋田の「いぶりがっこ」を始め東北地方には数多くの漬物の特産品があるが、これは冬期の野菜の保存法として漬物が作られてきたことによるものであろう。ところが、高速道路を中心とする幹線道路網の整備と出荷前の予冷技術及び保冷車の開発・普及によって、野菜の生産地・消費地及び流通システムに劇的な変化が生じたのである。

5.1 野菜産地の季節による変化

葉菜類の代表としてキャベツを、根菜類の代表としてダイコンを取り上げ、東京都中央市場の月別・産地別入荷量統計(2010年)をグラフ化したものが、図-1、図-2である。

キャベツは夏・秋には群馬県からの出荷が多く、冬・春には愛知県からの出荷が多くなっている。

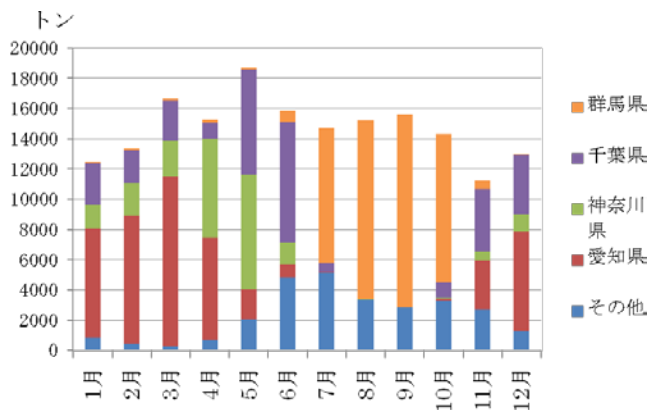


図-1 東京中央市場計・キャベツ入荷量 (2010年)

一方、冬期が旬のダイコンは冬・春には千葉県、神奈川県からの出荷が多く、夏・秋には北海道、

青森県からの出荷が多くなっている。

両種共に、季節による産地の変化が顕著である。

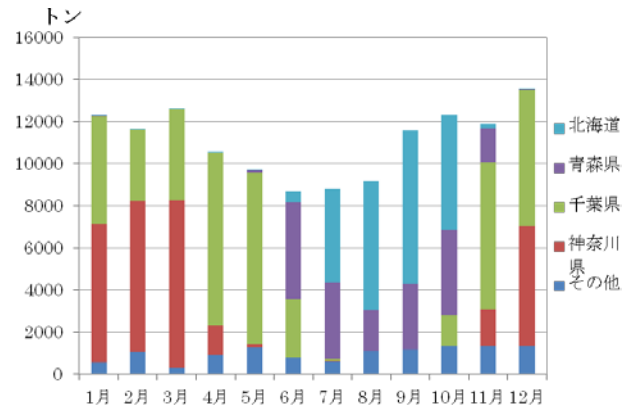


図-2 東京中央市場計・ダイコン入荷量 (2010年)

5.2 秋田県産野菜の月別出荷量と出荷先

平成22年度の秋田県産野菜の月別出荷量を示したものが図-3である(秋田県資料)。夏期に集中しており、8月だけで年間の約4割を占めている。

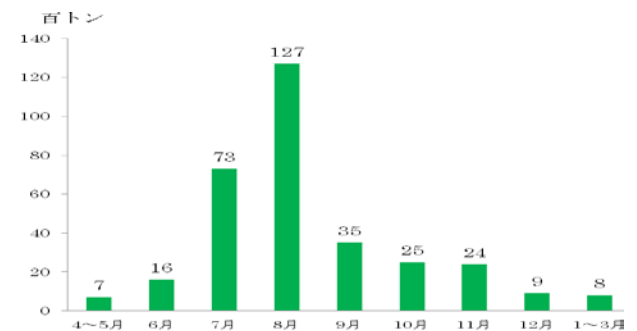


図-3 秋田県産野菜の月別出荷量 (平成22年度)

同じく秋田県資料によれば、平成17年に出荷された秋田県産野菜約5万5千トンの内、64%が京浜・京阪神・中京地方へ出荷されており、県内への出荷は24%に留まっている。秋田県が夏期には野菜の生産地になる一方、冬期には消費地になっている様子が窺える。

6. 顰(ひそみ)に倣う

事の善悪を考えずに他人の真似をすることを戒める「顰に倣う」という言葉がある。これは荘子の言葉で、儒学者が古代の為政者の政治を理想としていることを批判し、時代の変化を受け入れていくことの重要性を述べたものである。社会資本も時代の変化を受け、あるいは時代を変化させながらその機能・効用を発揮している。

国土の技術政策の研究を担う者として、常に時代の変化を見逃さずに研究に取り組んでいきたいと考えているところである。